

本稿はジェンダーと言語に関わる基本文献を簡単なコメントをつけて紹介し、関心をもつ方々への情報提供を目指すものである。ここでは、「文法的性」(genre)を「性」,「自然の性」(sexe)を性と記す。また「文法的性」の別を「男性」・「女性」,「自然の性」の別を男・女と表記することにする。

ジェンダーと言語の関係を考えるとき、まず区別しなければならないのは、ある言語においてそれが主として言語構造に関わる事実なのか、それとも言語運用に関わる事実なのかという点である。たとえば、フランス語名詞の「性」はフランス語の言語構造に関わる事実である。他方、日本語における男ことば・女ことばは発話の際に顕れる発話者の言語運用に関わる事象である。

また、ジェンダーは生物学的な性差(sexe)を基盤として、社会、歴史、文化の中ではぐくまれ、変化していく極めて人間的な事象である。そのため、言語をジェンダーという観点から眺めるとき、ある言語事実が言語の問題なのか、それとも、言語の外、すなわち、社会、歴史、文化の問題なのかを判断するのはそれほど簡単ではない。言語学ではどのようなデータと分析に基づいて、言語学ならではの関与的な発言ができるのか、常に自覚的でありたい。

以下においては、まずフランス語の「性」を包括的な立場から扱う文献を紹介する。そこでは、ラテン語からの歴史、「性」と性の関係、性数の一致、音、語形、意味など全般にわたる記述がなされている(cf.1. フランス語の「性」総論)。

次いで、より個別的なテーマをあつかう文献を挙げる。外国語として学ぶ場合は言うまでもないが、「性」のある言語の話者にとっても、「性」の判別や決定はときとして自明のことではないらしい。ネイティブ・スピーカーや第2言語の学習者は名詞の「性」をどのように習得するのか(cf.2. 1. 「性」の習得)。借用語や新語などの「性」はどのようにして決まるのか(cf.2.2.借用語の「性」)。接尾辞には「性」が決まっているものが多いが、どのようなことがわかっているのか(cf.2.3.接尾辞の「性」)。また、代名詞の「性」は名詞の「性」とどう関わるのだろうか(cf.2.4.代名詞における「性」)。

ところで、時代とともに女性の社会進出が進むのはおそらく世界的な傾向といえるが、フランス語など「性」を持つ言語では、これまで女がつかなかった職業につく女をどう表現するかという問題が出てくる。いわゆる職業名詞の「女性化」(féminisation)の問題であるが、これは言語によりだいぶ違いがあるらしい。(cf.3.1.職業名詞の「女性化」)。他方、ことにアングロサクソン系の国々で1960年代から始まったフェミニズム言語理論は、男のことばとは異質な女のことばの分析や、言語における性差別の解消に関心を向ける(cf.3.2.女性語とフ

エミニズム言語理論)。

最後に、ロマンス語だけでなく、さまざまな言語におけるジェンダーの研究にも共時的かつ通時的な目配りをしておこう (cf.4.さまざまな言語のジェンダー)。

いずれも網羅的な文献紹介ではなく、興味深いと思うものを選択的に選んでいる。今後の研究の進展とともに、読者諸氏にも情報を補っていただければ幸いである。

1. フランス語の「性」総論

1.1. 導入として興味を持たせるには

泉邦寿(1993): 『フランス語の語彙と表現 一歩進んだ意味の世界』バベルプレス, 1. 男性と女性, pp.3-9.

初級を終えたばかりの学習者でも興味深く読むことができる、文化の薫りにあふれた小論。

大橋保夫 (1993): 「フランス語とはどういう言語か」, 『フランス語とはどういう言語か』, 駿河台出版社, pp.7-57 (初出 1973 年)。

DAMOURETTE & PICHON の「性」を擬人的メタファーと捉える立場を踏襲しつつ、独自の視点から言葉の問題として「性」を考えようとした有名な論文。

LUPINKO, A. (1990): “ Les marques du genre en français ”, *Le gré des langues* 1, pp.189-195.

フランス語で読める「性」ミニ概論。

1.2. 辞典・文典など

Grand Larousse de la langue française, vol. 3, le genre の項。(H. Bonnard 執筆担当)

フランス語で書かれたものとしてまず読むべき、すぐれた概説。印欧語以降の歴史もコンパクトにまとまっている。

ARRIVÉ, M. et alii.(1986): *La grammaire d'aujourd'hui - guide alphabétique de linguistique française*, Flammarion, genre の項。

「性」について基本的な問題点を簡潔にまとめる。名詞が持つ文法的カテゴリーとしての「性」と「クラス」(classe)の違い、「性」と性のずれ、語形による「性」の予測、ネイティブ・スピーカーも「性」を間違えやすい語のリストなど実用面でも有益。

朝倉季雄 (1955): 『フランス文法事典』, 白水社。

genre と genre des noms の項目(pp.167-173)。

朝倉季雄 (1967): 『フランス文法覚え書き』, 白水社。

「un oeuf de canard 種族名の問題」, 「Elle est son meilleur ami 男性の無性的用法」, 「Vivent les rois! 男女を含む男性複数形」, 「Un avocat, une avocate 職業名と女性形」, 「Ma chère maître 性の一致の問題」, 「Mon chéri, ma chérie 情意的意図による性の転換」, 「sale petite donneuse 軽蔑的意図によ

る性の転換」の章(pp.130-178)．大事な問題は例文とともに，一通りすべて取り上げられている．

GREVISSE, M. (1994): *Le bon usage*, 13^e édition, Duculot,.

規範文法の立場に立つが，記述はそれほど明快ではない．ネイティブ・スピーカーにとっても「性」は自明とは限らないのだろう．après-midi, interview など，頻度の高い名詞にも揺れがある．

1.3. 研究書

DAMOURETTE J. & E. PICHON (1911-1940): *Des mots à la pensée*, tome I, ch.4, Editions d'Artrey.

古典的研究．D. & P.の用語で「性」は，sexuiseblance．自然の性（とくに人間の男女）の区別を性をもたない対象にまで拡張．「性」を自然の性のメタファーと捉えた．異論の余地もあるが「性」に関するほぼすべての問題を豊富な事例をもとに独自の観点から説明した．ただし職業名詞の女性形についてほとんど言及がないのは時代の故か．

YAGUELLO, M. (1979): *Les mots et les femmes*, Petite Bibliothèque Payot.

社会言語学の観点からジェンダーと言語の関係を総合的に考察したフランスでは最初の著作．

YAGUELLO, M. (1989): *Le sexe des mots*, Belfond.

FRANTEXT を検索して「性」の観点から問題含みの語を集めた語彙集．読みやすく導入に良い．石野好一(1990): 「言語に関する通念と言葉の性差別 M. YAGUELLO の最近の研究」, 『フランス語学研究』24号, pp.63-65 の紹介も参照．

藤田知子 (1990): 「言語と性差 フランス語名詞の「性」(genre)について」, 『異文化コミュニケーション研究』(神田外語大学異文化コミュニケーション研究所), 3, pp. 1-21.

文法的「性」と指示対象の自然の性との間に不一致がある有生名詞をとりあげ, 「性」の意味を追求した論文．豊富な例示．

ドルヌ, フランス(1993): 「フランス語 ジェンダーと性」, 『日本語学』vol.12-6, (井出(編)(1997)に再録. pp.162-168.)

言語学の問題として「性」を考えると「性」は恣意的ではないことがわかる．とくに MILNER (1988) を踏まえた指小辞-on, -ette 等についての展開が鋭い．

MICHAUD, Cl. (2002): *Le sexe en linguistique, Sémantique ou zoologie? Vol 1, Les analyses du genre lexical et grammatical des années 1920 aux années 1970*, L'Harmattan.

「性」に関する言語研究のフェミニズム批評．MEILLET, MARTINET, JAKOBSON などの主要な言語学者が「性」をどのように扱ってきたかがわかる．

KOSKAS, E. & D. LEEMAN (éd.) (1988): “Genre et langage”, Actes du colloque tenu à Paris X, LINX, numéro spécial.

「性」についての学際的論文集．問題の広がりを知るのに有益．

KASSAI, G. (éd.) (1988): *Contrastes, La différence sexuelle dans le langage*.

性差は言語にどのように反映するか．言語学，社会学，心理学，文化人類学，文学等の学際的視野から検討した特集号．

2. 文法的「性」の決定

2.1. 「性」の習得

カナダ，ドイツなどで研究が盛ん．ネイティブ・スピーカーは容易に「性」を習得するが，第2言語では問題が多い．子供の言語獲得，外国語教育など応用言語学の領域と重なる．

SURRIDGE, M. (1995): *Le ou la? The Gender of French Nouns*, Clevedon.

フランス語の「性」を習得するための練習問題つき参考書．音韻・形態・意味のすべてにわたって，フランス語の「性」の特徴が記述されている．実用の立場で公平に書かれた，優れた概説書でもある．

SURRIDGE, M. (1993): “ Gender Assignment in French: The Hierarchy of Rules and the Chronology of Acquisition ”, *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, vol. 31-2, pp.77-95.

上記の本の理論的裏づけ．フランス語の「性」は恣意的・非論理的というわけではないので，教師はきちんと指導すべきと主張する．

TUCKER, G. R., W. E. LAMBERT & A.A. RIGAULT (1977): *The French Speaker's Skill with Grammatical Gender: An Example of Rule-Governed Behavior*, Mouton.

フランス語名詞の「性」は，語尾の音によって予想できる．無意味語のリストを使った，ネイティブ・スピーカーによる「性」の判定の実験結果は有意に一致し，音による法則には生産性があるとする．フランス語の「性」は，音によって習得されるという主張の基礎をなす重要な研究．

CLARK, E. V. (1985): “ Acquisition of Romance, with Special Reference to French ”, in SLOBIN D. I. (ed), *The Crosslinguistic Study of Language Acquisition*. Vol.I: The Data. Erlbaum, pp. 687-782.

子供の言語習得に関する基本文献．名詞は，まず裸で用いられ，次に定冠詞つき，つづいて不定冠詞つきが出る．3歳までは「性」の間違があるが，それ以降はめったにない．その他，語形成の生産性も面白い．子供は，動詞の agent をあらかず語を，-eur/-euse の付加によって簡単に作る．

MÜLLER, N. (2000): “ Gender and Number in Acquisition ”, in UNTERBECK, B. & M. RISSANEN (2000): pp. 351-399.

フランス語とドイツ語のバイリンガルの子供の観察．ネイティブ・スピーカーは，「性」と「数」を同時に，極めて初期に習得する．定冠詞，ついで不定冠詞が習得され，文法カテゴリーとしての名詞の「性」が獲得される．

BARTNING, I. (2000): “ Gender Agreement in L2 French: Pre-advanced vs Advanced Learners ”, *Studia Linguistica* 54(2), pp. 225-237.

定冠詞は不定冠詞よりも「性」の一致の間違いが少ない。女性形の形容詞は形が複雑なので、男性形に比べて一致の習得が難しい。スウェーデン語話者が対象。

DEWAELE, J.-M. & D. VÉRONIQUE (2000): “Relating Gender Errors to Morphosyntax and Lexicon in Advanced French Interlanguage”, *Studia Linguistica* 54(2), pp. 212-224.

「性」の習得度と、フランス語一般の習得度とは必ずしも相関しない。フラマン語話者が対象。

2.2. 借用語の「性」

英語からの借用語を扱うものがほとんど。franglais や *Dictionnaire des termes officiels de la langue française* (1994) などに現れる、借用語を極力排し、純粋なフランス語を擁護しようとする規範意識に関わる。借用語への「性」の付与についてはフランス以上にカナダ、アメリカでの関心が高い。借用語の大半が「男性」となり、「女性」となるのは1割程度。

HUMBLEY, J. (1974-2): “Vers une typologie de l'emprunt linguistique”, *Cahiers de lexicologie*, vol.25, pp. 46-70.

SURRIDGE, M. (1984): “Le genre grammatical des emprunts anglais: la perspective diachronique”, *La Revue canadienne de linguistique*, 29-1, pp.58-72.

TLF 等の辞書をもとに、17世紀以降の借用語で「女性」となる語が減り、「男性」となる語が増えていることを示す。

ROCHE, M. (1992): “Le masculin est-il plus productif que le féminin?”, *Langue française*, no. 96, pp. 113-124.

NYMANSSON, K. (1995-1): “Le genre grammatical des anglicismes contemporains en français”, *Cahiers de lexicologie*, Vol.66, pp. 95-113.

英語からの借用語が「女性」となるときの要因を考察。複合語の「性」にも少し触れる。

TOURNIER, J. (1997): “Un champ d'emprunts du français à l'anglais: La désignation des personnes”, *Cahiers de lexicologie*, Vol.70, pp. 185-195.

好論文。人を表す英語の借用語 444 語を分析。発音は英語風だときざなので仏語読みに、綴りは英語のままが多い。英語で多義の語も借用語としては一義となる。

GUILFORD, J. (1999): “L'attribution du genre aux emprunts à l'anglais”, *La Linguistique*, 35-1, pp. 65-85.

音楽雑誌がコーパス。やはり「男性」になりやすいが迷う例もある。pop, country など性が流動する名詞をアンケートで示す。

2.3. 接尾辞の「性」

接尾辞はそれぞれ「性」が決まっていることが多い。意味価値は指小辞、拡大辞、軽蔑的なニュアンスを伴うもの、意味領域が大体定まっているものなど

多種多様である。日本ではほとんど研究がなされていない語形成や派生の分野である。「性」の問題を超えてはいるが、関連はあるので、いくつかの著作を挙げておく。

MILNER, J.-Cl. (1988): “ Genre et dimension dans les dimunitifs français ”, in KOSKAS & LEEMAN, pp. 191-202.

「男性」・「女性」と大小が密接に関連することを動物名やその他の名詞について明らかにした。難解だが、後の DELAY や DAL が取り上げる指小辞の問題を一部先取りした論文。

DELHAY, C. (1996): *Il était un “petit X” - Pour une approche nouvelle de la catégorisation dite diminutive*, Larousse.

指小辞の問題を鋭く考察した画期的な博士論文。成果の一端は DELHAY, C.(1995): “ Le diminutif: sans comparaison ”, *Faits de langues*, 5, pp. 63-72.でも知ることができる。

DAL, G. (1997): *Grammaire du suffixe -et(te)*, Didier Erudition.

CORBIN, D.(1987): *Morphologie dérivaionnelle et structuration du lexique*, 2 vol., Niemeyer.

HASSERLOT, B. (1972): *Etude sur la vitalité de la formation diminutive française au XX^e siècle*, Uppsala, Almqvist & Wiksell.

読書の折々に探した-et(te), -ot(te)など指小辞のコーパスを提示。記述的。*Lexique* (1991), no.10, La formation des mots, Presses Universitaires de Lille.

語形成に関する特集号。-asse, et(te), -ier, -erie などについての論文がある。

BUVET, P.-A. (1997): “ Les noms de machine en -euse ”, *Cahiers de lexicologie*, Vol.71, pp. 5-19.

電子化を目指す Gaston Gross 系の論文。動詞を名詞化する語尾 -euse(機械), -eur (行為者), -age(行為)の簡単な分析。

PUPIER, P. (1999): “ Le morphème est plus une unité de forme qu'une unité de signification Le cas de -on en français ”, *Cahiers de lexicologie*, 74, pp. 53-60.

接尾辞-on は「男性」の派生語をつくる点で統一性があるが、その意味は極めて多義的である。問題の広さを知るのによい。

ZWANENBURG, W. (1988): “ Flexion et dérivation: le féminin en français ”, *Aspects de linguistique française*, Rodopi, pp. 191-208.

生成文法の枠組での研究。

2.4. 代名詞における「性」

人称代名詞の「性」は、名詞の「性」に一致するのが原則であるが、いつも原則に従うわけではない。無生物名詞を「性」のある人称代名詞で受けるときは制約がある。

KLEIBER, G. (1994): *Anaphore et pronoms*, Duculot.

照応と代名詞に関する必読文献。「性」は代名詞を考える上でも避けては通れない。代名詞の「性」は、指示対象が人間か否かで表れ方がかなり異

なる。

CORNISH, F. (1986): *Anaphoric Relations in English and French: A Discourse Perspective*, Oxford University Press.

il や elle などの人称代名詞が先行詞なしで、外界指示的に用いられる場合の分析。特に、4.4.の章。指示対象が聞き手の意識にのぼっていると話し手がとらえたときに、無生物名詞であってもそれを il や elle で指すことができる。

TASMOWSKI-DE-RYCK, L. & P. VERLUYTEN (1985): “Control Mechanisms of Anaphora”, *Journal of Semantics* 4, pp. 341-370.

上記の問題の口火を切った論文。

HÄRMÄ, J. (2000): “Gender in French: A Diachronic Perspective”, in UNTERBECK & RISSANEN (2000), pp. 609-619.

古フランス語から、標準的ではない現代語までのフランス語を扱う。話し言葉では、照応の際に ça などが用いられて、人間の性も中性化される傾向があるという。

DANELL, K. (1973): *L'emploi des formes fortes des pronoms personnels pour désigner des choses en français moderne*, Uppsala, Acta Universitatis Upsaliensia, Studia romanica upsaliensia 13.

3. ジェンダーからみた言語と社会

3.1. 職業名詞の女性形形成

フランス語の職業名詞には女性形がなく、女についても男性形のまま用いるものが多数ある。フランス語圏の国々では1990年代、そうした慣用を改め、「女性」の職業名詞を整備しようとする言語政策が講じられた(ex. le ministre la ministre, le député la députée など)。とくにフランスでは1997年末から一年間、官民あげての大論争となった。またインターネットの普及により、公的機関などのサイトを通じて、それぞれの国の違いを含めた最新情報が得られるようになった。

言語学の見地からは、社会の変化にともなう性と「性」の不一致がもたらす具体的な不都合、規範意識との齟齬、英語との関わり、フランス語の多様性など、社会言語学のトピックと関連する。文献も非常に多い。

3.1.1. 初めに読むとよいもの

YAGUELLO, M. (1998): “Madame la ministre”, in *Petits faits de la langue*, Le Seuil, pp. 118-139.

20年前からこの問題を追及してきた Yaguello のエッセー風小論。フランス人の言語観は特殊だという。

VOGEL, K. (1997): “L'usage du genre en français: tradition linguistique ou sexisme?”, *Le Français dans le Monde* 289, pp. 26-33.

一般向けの概説で、読みやすい。

BECQUER, A., B. CERQUIGLINI et alii.(1999): *Femme, j'écris ton nom: guide d'aide à la féminisation des noms de métiers, titres, grades et fonctions*, La Documentation Française.

フランス政府の要請により INaLF が作成した女性職業名詞のガイドブック。現実の使用の記述ではなく、あるべき姿の提示である。歴史的な記述が面白い。アカデミー・フランセーズ設立以前は、「女性」の職業名詞がもっと自由に用いられていた。基本文献。

藤村逸子, 糸魚川美樹 (2001): 「フランス語における職業名詞の女性化—カスティーリャ語との比較」, 『言語文化論集』(名古屋大学言語文化部), 23-1, pp. 141-156.

スペイン語の職業名詞の女性形形成は、フランス語とは比較にならないほど容易にすすむ。それは言語構造の違いによるのか、社会の問題なのか。職業名詞に関する最新情報の把握に有益。

3.1.2 実際の使用の記述

HOUEBINE-GRAVAUD, A.-M.(éd.) (1998): *La féminisation des noms de métiers*, L'Harmattan.

フランス政府が職業名詞の「女性化」に乗り出したのは1986年からだが、最初の試みは失敗に終わった。編者は当時の審議会メンバーでこの分野の第一人者。同じ社会言語学的調査を10年後に再び行い、現実の使用実態を報告した。社会階層が中層の人は男性名詞を維持する傾向がある。話し言葉では男女同形のまま、冠詞のみを変える方法をよく採用する。社会的地位の高い職業に限らず伝統的に男の職業では「女性化」がすすまないことなど、興味深い指摘がある。重要な文献。他にも以下を始め、論文多数。

HOUEBINE-GRAVAUD, A.-M. (1989): “Une aventure linguistique: la féminisation des noms de métiers, titres et fonctions en français contemporain”, *Terminologie et Traduction*, pp. 91-145.

HOUEBINE, A.-M. (1988): “La féminisation des noms de métiers en français contemporain”, in KASSAI(1988), pp.39-71.

KHAZNADAR, E. (2000): “Masculin et féminin dans la dénomination humaine: linguistique et politique Aperçu de la pratique québécoise” *Le français moderne* LXVIII-2, pp. 141-170.

カナダのフランス語を中心とした最新状況。カナダにおいてさえも用法の揺れは依然として見られる。また、職業名詞の「女性化」だけで言語的な男女平等が実現しないのは明らかであり、求人情報の書き方にルールを設けるなど次の動きが始まっている。

KHAZNADAR, E. (1993): “Pour une première; La dénomination de la femme dans l'actualité, Dichotomie, affixation et alternance”, *Cahiers de lexicologie*, 63-2, pp. 143-169.

1990-92年のフランスの状況の記述。職業名詞の「性」と人の性が一致し

ない場合には、規範と伝達欲求の相克の結果、様々な現象が引き起こされる。フランス語で人に言及するとき、性別はまさに欠くことのできない情報。

BOEL, E. (1976), “ Le genre des noms désignant les professions et les situations féminines en français moderne ”, *Revue Romane* 11, pp.16-73.

好論文。1970年代のマスメディアにおける、女を示す職業名詞の丹念な記述。女を指す男性名詞は、政治・行政職や自由業に多くみられ、とくに公的文書において目立つ。

PERNET, M. (1994): “ Féminisation et masculinisation des titres de professions au Québec ”, *La linguistique* 30-1, pp. 123-135.

職業名詞の「女性化」は派生によって行われるが、女性名詞の「男性化」では新語が作られ、そこからさらに別の女性名詞を派生する。たとえば *jardinière d'enfant* が消えて、*éducateur/éducatrice* のペアに替わる。カナダの事例。

TÉTET, C.(1997): “ La linguistique, le sport et les femmes Reconnaissance, dénomination et identification de la femme sportive ”, *Cahiers de lexicologie*, Vol.71, pp. 195-220.

好論文。女のスポーツ選手をどう呼ぶか。辞書の見出しとスポーツ記事の分析。女性形があっても男性形を用いる傾向があり、とくに *arbitre* など権威のある語は男性形が好まれる。職業名詞と共通する所が多い。

YAGUELLO, M.(1988): “L'élargissement du capitaine Prieur”, in KASSAI(1988), pp. 73-77. (YAGUELLO(1991): *En écoutant parler la langue*, Seuil, pp. 18-24.に再録)。有名な *le capitaine Prieur* 問題の社会言語学的記述。

3.1.3 変革主義的観点

LARIVIÈRE, L.-L. (2000): *Pourquoi en finir avec la féminisation linguistique ou à la recherche des mots perdus*, Boréal.

カナダの社会言語学者が職業名詞の女性形形成が必要な理由とそのための議論をまとめる。基本的な問題が具体例とともにわかりやすく述べてある。

LABROSSE, C. (1996): *Pour une grammaire non sexiste*, les Editions du remue-ménages.

語形態のさまざまな変更を具体的に提案。男女を含む複数形として *illes*, 形容詞の男女の別をなくすための表記法 *-èle(actuèle)* など。カナダで英語並みに性を中立化するためには、ここまでやらなければならないことがわかる。

FREISCHMAN, S. (1997): “the Battle of Feminism and *Bon Usage*: Instituting Nonsexist usage in French ”, *The French Review* Jun.70, pp. 834-844.

フランス語で「女性化」が進まないのは、フランスが言語規範崇拜の国だからである。

3.1.4 その他

BAUDINO, C. (2001): *Politique de la langue et différence sexuelle La politisation du genre des noms de métier*, L'Harmattan.

「女性化」の問題を言語政策、言語社会学の観点から研究した博士論文。

NIEDZWIECKI, P. (1994): *Au féminin! , Code de féminisation à l'usage de la francophonie*, Nizet.

ベルギーで発行された「女性化」のための大部な研究書。

MOREAU, Th. (1999): *Le Nouveau Dictionnaire féminin-masculin des professions, des titres et des fonctions*, Métropolis.

スイスの文学研究者による語彙集。言語社会的なフランス語の歴史が序文で簡潔に紹介されている。

LEEMAN, D. (1989): “ Remarques sur les notions de sexe et de genericité ”, *Cahiers de grammaire* 14, pp. 85-107.

指示対象としての男・女は、文法の中にかにとりこまれているか。男性名詞 (l'homme など) の総称用法に女が含まれない場合の分析など。

上野千鶴子・メディアの中の性差別を考える会(編) (1996): 『きっと変えられる性差別語 私たちのガイドライン』, 三省堂。

れいのるず・秋葉かつえ「言語改革と社会改革 アメリカの場合」, pp.161-191 の紹介のように、性差別を解消するため、英語は性の表示を避ける方へ、フランス語は「女性化」によって性を明示する方向に向かった。ことばと女を考える会(編) (1985) 『国語辞典に見る女性差別』, 三一書房。

3.1.5 インターネット上のサイト

フランス:

- DU FEMININ (L'INaLF)
<http://www.inalf.fr/feminin/>
Femme, j'écris ton nom... (1999) に基づいた、女性名詞の作り方のマニュアル。
- Madame la Ministre: La féminisation des noms en 10 questions (Centre International d'Etudes Pédagogiques)
<http://www.ciep.fr/chroniq/femi/femi.htm>
フランスにおけるこの問題を要領よくまとめている。諸研究や公文書などへのリンクも充実。
- Féminisation (Déclaration de l'Académie française, 14 juin 1984)
<http://www.academie-francaise.fr/langue/questions.html - feminisation>
アカデミー・フランセーズの立場。
- COMMISSION GENERALE DE TERMINOLOGIE ET DE NEOLOGIE (1998,

oct) : Rapport sur la féminisation des noms de métier, fonction, grade ou titre
<http://www.culture.gouv.fr/culture/dglf/cogether/feminisation/sommaire.html>
政府刊行物 .

ベルギー:

- La féminisation (service de la langue française, Site officiel de la communauté française de Belgique)
<http://www.cfwb.be/franca/pg026.htm>
ベルギーでは 1993 年に「女性化」促進が決まった .

カナダ:

- Office de la Langue Français: Québec
<http://www.olf.gouv.qc.ca/>
ケベック州では 1978 年に職業名詞の「女性化」を提案 , 1986 年に女性名詞のリストを公表 , 1988 年に性差別的ではないコミュニケーションのためのガイドラインを発表 .
- Féminisation et neutralisation des titres de poste et des textes (Secrétariat du Conseil du Trésor du Canada)
http://www.tbs-sct.gc.ca/ucs-ngc/francais/outils/redaction/feminisation/language_f.html
文書を性差別的でなく書くための実用的なサイト . 職業名詞だけでなく , 代名詞の使い方なども含む .
- Guide de rédaction non-sexiste (La Direction générale de la condition féminine de l'Ontario)
<http://www.ofa.gov.on.ca/francais/splashpage.html>
オンタリオ州では , 1994 年にガイドブックが出た .

3.2. 女性語とフェミニズム言語理論

「性」が言語構造に関わるのに対し , 言語運用のレベルで発話の際にさまざまに顕れるのが男性語 (男ことば) と女性語 (女ことば) である . 言語の違いを反映し , 英語 , 日本語 , フランス語の世界では少しずつ違った形で問題になる .

英語はあまり男性語と女性語の区別がない言語と言える . アメリカでは 1960 年代後半から , 女性語を権力を持たない者の劣位の言語として捉えるフェミニズム言語理論に基づく研究が盛んに行われ , 言語から性差別をなくす言語改革運動にも発展した (ex. chairman chairperson chair). それに対して , 日本語は男性語と女性語の差が大きい言語であるが , 国語学の伝統のなかで , 女房ことばなどの女性語は劣位の言語というよりも位相の違いとして考察された . アメリカのフェミニズム言語理論の影響を受けてからは , 日本語を性差別の観点か

から見直す試みがなされた。

フランス語は、あまり男性語と女性語の差はないが、「性」をもつ言語であるため、「性」の本質と機能に関する省察は古くからあった。フェミニズム言語理論の影響は1970年代後半に現れ、アメリカ流の言語改革というよりも、実際の運用面で、とくに職業名詞の女性形をどうするかという形で問題提起が続いている (cf. 3.1.)。

高橋良子(2000-01): 「ジェンダー(性差)とコミュニケーション」, 『三色旗』(慶応義塾大学通信教育部), no.632, pp.49-57; no.633, pp.23-31; no.634, pp.32-40; no.635, pp.32-41.

日米女性語研究のすぐれた論評。文献も役立つ。講義の書き下ろしなので読みやすい。

中村桃子(2001): 『ことばとジェンダー』, 勁草書房。

英語を中心とした、ことばとジェンダー研究。これまでの研究史と最新の成果を示しつつ、新しい方向を模索する。日本語の「女ことば」への一章もある。文献も有益。

井出祥子(編)(1997): 『女性語の世界』, 明治書院(初出『日本語学』1993, 5月号, vol.12「世界の女性語・日本の女性語」)。

17の外国語と日本語における「性」, 女性語などジェンダーと言語に関する総合的な特集。フェミニズム言語理論に基づく女性語の研究に力点が置かれている。

寺田智美(1993): 「日本における女性語研究史」, 『日本語学』vol.12, pp.262-309。1990年代初頭までの国語学の女性語研究文献総覧として有益。上記の井出(編)には再録されなかった。

遠藤織枝(1997): 『女のことばの文化史』, 学陽書房。

古代から現代までの日本語を女性語の観点から考察した興味深い通史。

鷲 留美(2000): 「女房詞の意味作用 天皇制・階層性・セクシュアリティ」, 『女性学年報』21, pp. 18-35

室町時代に発する女房詞への評価や意味付けの変遷を歴史的に考察。そのイデオロギー性を鋭く指摘。

LAKOFF, R. (1975): *Language and Women's Place*, Harper & Row, (ロビン・レイコフ『言語と性』れいのるず・秋葉かつえ訳, 有信堂, 1985年)。

女性語について古くはイエスペルセンに否定的でステレオタイプの記述がある。レイコフの考察も直観的でイエスペルセンのそれとよく似ている。だが女性語をはじめて研究の中心に据えた功績は大きく、批判も含めてその後の女性語研究のパイオニアとなった。

SPENDER, D. (1980): *Man made Language*, Routledge. (スペンダー『ことばは男が支配する 言語と性差』, れいのるず・秋葉かつえ訳, 勁草書房, 1987年)

CAMERON, D.(1985): *Feminism and Linguistic Theory*, Macmillan Press. (カメロン『フェミニズムと言語理論』, 中村桃子訳, 勁草書房, 1990年)

上記二書はアングロサクソン系のフェミニズム言語研究の大きな成果で

ある。中村桃子氏の解説「フェミニストの言語研究 英語と日本語の場合」が理解に役立つ。

COATES, J.(1986): *Women, Men and Language*, Longman. (コーツ『女と男とことば 女性語の社会言語学的研究法』, 吉田正治訳, 研究社出版, 1990年) 社会言語学の枠組みでイギリス英語を資料として、女と社会と言語の関係を論ずる。

TANNEN, D. (1994): *Gender and Discourse*, Oxford UP. 談話分析の手法で、男女のコミュニケーション・スタイルを分析。性差は文化の差という立場。

AEBISCHER, V. (1985): *Les femmes et le langage: représentations sociales d'une différence*, PUF, (Sociologie d'aujourd'hui). 女の話し方の特徴とされるおしゃべりに関する社会学的研究。

IRIGARAY, L. (1990): *Sexe et genre à travers les langues*, Grasset.

IRIGARAY, L. (éd) (1987): *Langages*, No. 85, "Le sexe linguistique". 精神分析が男性中心に造られた理論であることを批判してラカン派を破門されたイリガライによる女性語の考察。言語学的には得るところが少ない。

4. さまざまな言語のジェンダー

印欧語では、英語、ペルシア語などの「性」を消失した言語を除いて、多くの言語に「性」が残っている。ほかに性も名詞のクラスわけの基準となっている言語は少なくない。また、人間の男女の表象という観点からも、言語横断的な研究書が出版されている。

CORBETT, G. (1991): *Gender*, Cambridge University Press. 「性」に関する唯一の網羅的概説。200以上の言語の「性」に言及する基本文献。同じ著者による *Number* が2001年に出版された。

MEILLET, A. (1931): "Essai de chronologie des langues indo-européennes: la théorie du féminin", *Bulletin de la Société de linguistique de Paris* 32, pp.1-28.

原印欧語には「有生」と「無生」しかなく、後になって「有生」から「男性」と「女性」ができたと考えられる。動詞の agent を示す名詞接尾辞が「性」の発展に果たした重要性など、興味深い指摘がある。

UNTERBECK, B. & M. RISSANEN (ed) (2000): *Gender in Grammar and Cognition: Approaches to Gender, Manifestations of Gender* (Trends in Linguistics. Studies and Monographs, 124), Mouton de Gruyter.

名詞クラスという観点から「性」をとらえた言語類型論的立場の論文集。大部分は印欧語を扱うが、アメリカインディアンの言語やスワヒリ語なども取り上げられている。「性」のある言語には必ず「数」があるという一般的法則など、一言語の観察だけでは得ることのできない記述が新鮮。

HELLINGER, M. & H. BUSSMANN (ed) (2001): *Gender Across Languages: The Linguistic Representation of Women and Men, Vol. 1.* (Studies in language and

society, 9), J. Benjamins

人間の男女の表し方を30の言語を取り上げて考察した社会言語学の論文集。3巻のうち第1巻が2001年秋に刊行。フランス語、日本語は、第3巻に収録。

IBRAHIM, M.H.(1973): *Grammatical gender*, Mouton.

セム語と印欧語を中心に「性」の起源や本質、名詞クラスとの関連などについて考えた著作。

梶茂樹(1993): 「名詞の性」, 『月刊言語』10月号, pp.20-27.

大橋(1993)と基本的に同じ立場。無生物名詞を有生名詞と同じ原理で捉える言葉のしくみとして「性」を考える。フランス語を中心に他の言語にも触れる。

5. その他

HUSTON, N.(1988): “ Pourquoi les tabous linguistiques ”, in KASSAI(1988) ,pp.11-18.

ののしりと誓いの言葉をジェンダーの観点から捉えた文化人類学からの短いが興味深い考察。

(神田外語大学・名古屋大学)